

第9・10回研究会報告

『言語文化と日本語教育』第9号は水谷信子先生の退官記念号となったため、第9回の研究会の報告ができませんでした。ここで第10回研究会とともに御報告したいと思います。

第9回研究会は、昨年12月10日、お茶の水女子大学国語国文学会との合同研究会として開催されました。「終助詞「よ」の音調とその機能」「中国語母語話者の日本語の受身文」「真名本『曾我物語』研究－梶原氏をめぐって－」というバラエティに富んだ発表の後、水谷信子先生の講演「言語と文化と日本語教育」が行われました。お話を拝聴しながら、改めて、水谷先生の足跡がそのまま日本語教育の歩みであったのだという感を深めた次第です。研究会終了後、茗溪会館において合同懇親会が催されました。合同の研究会・懇親会ということで、お顔ぶれも多彩な方々が多数ご参加下さり、たいへん盛大な会となりました。退官なさった先生方や懐かしい会員の方々と旧交を暖めることができ、お別れするのが名残惜しいという思いでいっぱいになったのは、私一人ではなかったと思います。

第10回研究会は翌年7月1日に行われ、「談話における「だろう／でしょう」の用法について」「中日古代婚姻用語の比較－妻妾の呼称を中心に－」「予測文法(2)－語の担う情報－」「初級日本語学習者に対するコンシャスネス・レイジングの試み」といった広範な研究発表がなされました。発表の合間に、『言語文化と日本語教育－水谷信子先生退官記念号－』の贈呈式が行われ、水谷先生の、現役の頃と少しもお変わりにならないお元気なお姿を拝見することができ、会員一同、懐かしい思いに浸りました。

研究会の後の総会では、運営委員が改選され、佐々木泰子さん、渡辺亜子さん、田代ひとみさん、川口良の4名が承認されました。

今年3月に佐々木泰子さんが助手を退任され、その後を引き継いだ私の初めての大事な仕事、水谷先生の退官記念号となった『言語文化と日本語教育』第9号の編集でした。これまでになく大がかりな論文集であったため、緊張もいたしましたが、何とか完成させ、皆様のお手元にお届けすることができ、ほっと胸をなで下ろしております。私とともに4月から教務補佐に就任した新井真美さん、山崎真弓さんのご協力に、この場を借りて感謝申し上げます。

(川口 良)